

## ワンポイント・ブックレビュー

野村進著『千年、働いてきました - 老舗企業大国ニッポン』角川oneテーマ21 (2006年)

下町の町工場には、数多くの優良企業が存在すると言われている。その道一筋、卓越した技術を持った職人たちが、いわゆる経験と勘によって、決して表には出てこない極々小さな部品を作り出す。現在の先端技術を根底で支えているのは、そんな町工場の職人たちかもしれない。

本書では、創業百年以上も続く「老舗」企業に焦点をあて、百年以上も続く所以、現代社会に受け入れられている所以などが紹介されている。各章には、さまざまな老舗企業が登場する。例えば、「第二章 ケータイに生きる老舗企業の知恵」では田中貴金属工業や福田金属箔粉工業、「第三章 敗者復活」ではDOWAホールディングス、「第四章 日本型バイオテクノロジーの発明」ではヒゲタ醤油や勇心酒造、「第五章 "和風"の長い旅」では大日本除虫菊や呉竹、「第六章 町工場 ミクロの闘い」では浅香工業や永瀬留十郎工場、「第七章 地域の"顔"になった老舗企業」では林原…。以前に耳にしたことがある企業もあれば、読んでみて「あの製品のあの企業が」と思い出す企業も少なくない。

著者は、老舗企業に共通する部分を5つにまとめている。第一に「血族に固執せず、企業存続のためなら、よそから優れた人材を取り入れるのを躊躇しないこと」、第二に「時代の変化にしなやかに対応してきたこと」、第三に「時代に対応した製品を生み出しつつも、創業以来の家業の部分は、頑固に守り抜いていること」、第四に「それぞれの"分"をわきまえていること」、第五に「町人の正義を実践してきたこと」である。とくに3つめの「家業の部分は頑固に守り抜いている」といった部分には共感できる。この間も、製造業を中心に事業の多角化が図られ、それにより成長した企業もあれば、逆に衰退した企業もあるだろう。衰退した企業の多くは、本業とはまったく異なる分野の事業に進出したことが大きな問題となっていたに違いない。かつて筆者が調べた企業の中にも、本業を守りつつ、本業の中で培われた技術や技能、人材というものを活かせるような分野を開拓、進出することで、持続的な成長を遂げていたケースがみられた。

コアとなる事業があって、それを支える技術や技能、人材がある。それがひとつのきっかけとなり、新しい事業につながる。それを続けてきたからこそ、地域の理解が得られ、信頼感が増し、現代社会にも受け入れられてきた。そんな老舗企業の姿から、企業の強みとは何か、企業の社会的責任とは何かを考えさせられる一冊といえる。(Y.O)